The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	俳句革新運動と造形美術の連関 ： 写生論再考を軸として
Author(s)	大廣, 典子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49388
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【29】

氏　　名	大廣典子（おおひろのりこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２６１０　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**俳句革新運動と造形美術の連関－写生論再考を軸として－**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　出原　隆俊 （副査） 教　授　中　　直一　　教　授　飯倉　洋一　　佛教大学教授　坪内　稔典

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、正岡子規の俳句革新運動を通時的に捉えて、その「革新」性とはいったい何であったのか、その表現志向について考察するものである。とくに写生論の再考を目標として、初期の詩歌論から最晩年の随筆に至るまで、ほぼ時系列順にテクストを取り上げ、写生論形成と美術界の動向との連関について検証しようとしたものである。

第一章は、正岡子規がどのように俳句の近代化を図ったかをその原理に及んで考察している。その際、近代化において先行する日本美術再興の理論と比較対照して論じている。旧来の詩歌の滅亡論から、最短形という統一純化の原理に基づく改革運動への転換を明らかにした。

第二章以下は、写生論と西洋美術に関する言説との連関を中心に論じている。

第二章は、子規の絵画理解と俳句制作の密接な相関性を検証している。ここでは、「地図的観念と絵画的観念」（明治２７年）などに注目し、写生論の転換期を従来の研究よりも早い時期に見出せるとする。

第三章は、美術界の動向と相関的に子規の俳句観および絵画観に変容が見られることを明らかにする。子規が旧派の画家たちの所見を通して、絵画の新派の動向をとらえ、自派の俳句の有効な視覚的モデルとしたと指摘する。

第四章は、「叙事文」（明治３３年）までが一つの区切りであるとし、写生的俳句の製作方法が絵画の戸外写生に倣うものであることを明らかにし、また、感情的写生の理念を反映させた創作を行ったとする。

第五章は、子規と洋画家との交流や自身の水彩画制作との関連に注目し、晩年の写生論の到達を考察する。

全体を通して、子規が自らの方向性に最も合った視覚的モデルを選択し、自派の試みが時代に対して尖端的であることを確信していたとする。写生論の展開は、前近代の寓意的観念的な文芸からの脱却をめざして、感覚的な初見性を重視したこと、それが従来の定説であった洋画旧派の影響にとどまるものではなく、幅広い美術界の動向が関わっていることを明らかにしようとした。

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

子規の俳句革新運動について、同時代の絵画をめぐる従来の研究に徹底的にメスを加え、子規の写生論の展開に関わる絵画界の動向について、時期についても人脈についても大幅に視野を広げて検討を行い、実証的に新しい見解を提示したことは十分に評価されてよい。子規の論とフェロノサの発言との対比、鷗外の発言の参照なども有効なものと言えよう。

滅亡論から革新への試みの転換というダイナミズムを捉えようとすることなども刺激的であり、「印象明瞭」という初期の方向性が晩年まで貫かれて行こうとする道筋の提示も説得力をもつものである。俳句と絵画の連関ということから、蕪村の句を取り上げて分析することや俳句の英訳にも注目して俳句モンタージュ論の展開につながることを指摘するなど新鮮な問題提起も少なくない。

子規の俳句観を「文学としての俳句、芸術としての俳句」であるとし、西洋的な概念に即した「制度の確認」とするのも一つの見方として首肯することができる。

写生画帖の検討についても、今後の研究に発展する問題提起になりえており、成果の一つとすることができよう。

一方、絵画との関連に走りすぎるあまり、写生的俳句の製作方法が絵画の戸外写生に倣

うものであるとの指摘は、伝統的な吟行などへの視点を欠落させているといわざるを得ない。また、句の解釈をめぐっては、多方面からの検討、別な解釈の可能性の追求などに今後深めるべき課題がある。

論文後半に至ると、子規が晩年に至るまで美術に興味を抱いていたこと、あるいはさらに自ら写生画を作ったことなどが紹介されているものの、美術における写生をどのように理論化・昇華して俳句句作実践に応用したのかが、いまひとつはっきりしない嫌いがある。明治３０年代の子規が、題材として俳句のなかで写生を取り上げたことと別次元に、作風として絵画の影響をどのように受けていたのかということがわかりにくい。さらに、まとまった俳句論を発表しなくなった明治３２年、３３年以降の子規について、明治３２年ごろまでに子規の「革新」は一応の完成を見たのか、それとも明治３５年の死に至るまで続いたのか、ということについての判断も示されていない。

このように、残された課題も少なくないが、全体としては、資料を丹念に読み解き、従来の説に修正を迫ろうとする意欲にあふれており、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。